

Title	リカルドオの価値論 (二)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.3 (1922. 3) ,p.346(56)- 368(78)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220301-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リカルドオの價值論(二)

小泉 信 三

二

Adam Smith は價值なる語に特定物の利用、即ち使用上の價值と、一物の所有が賦與する他物購買力、即ち交換上の價值の二義あることを指摘したれども、前者に就てはたゞその大小の必しも後者の大小と並行せざる一事の外全く言ふところなきを以て、その價值論は交換價值論を以て終始したりと謂ふべきものなり。交換價值に就て Smith が論ずる主要問題に二あり。一物に既有の交換價值は何の尺度に由て最もよく測定せらるゝことを得るか、及び、抑も一貨物の他の貨物に對する交換比率は何に由て決定せらるゝか是なり。彼れは *Wealth of Nations* 第一篇の「眞價格と名義價格」(real and nominal price of commodities) を論ずる章に於て第一の問に答へ、貨物價格の構成諸部分並に「貨物の自然價格と市場價格と」を論ずる二章に

於て専ら第二の問に答ふ。

Smith は一貨物の交換價值は、その購買 purchase 若しくは支配 command し得る勞働量を尺度として之を測定すべしと説くものなり。謂へらく、分業一度行はれて自給自足己みたる後の社會に於ては、人の貧富はその他人の勞働を支配し得る程度に由て岐る。「故に一貨物の之を所有し、而して自ら之を使用又は消費するの意なくして、他の貨物と交換せんとするものに取りての價值は、其物が能く彼れをして購買又は支配することを得しむる勞働量に等し。」凡そ一物の眞價格、即ち之を獲得せんと欲する人が、眞に爲めに費やすところのものは、之を獲得する努力煩勞なり。凡そ一物の之を獲得し、而して之を或る他の物と換へんと欲するものに取りての眞價值は、彼れが自ら免れて他人に課することを得る努力煩勞なり。貨物又は貨物を以て購はるゝものは、吾人が肉體の努力に依て獲得するものと等しく、勞働に依て購はる。この貨幣又はこの貨物は實に吾人をして此努力を免れしむるなり。勞働は一切物に對して支拂はれたる最始の價格、本來の購買貨幣なり。地上一切の富が最初に購買せられたるは、金銀に依らずして、勞働に依れるものな

り。而してその之を所有し、且つ之を或る他の新生産物と交換せんと欲するものは取りての價值は、正にそれが能く彼等をして購買又は支配することを得しむる労働量に等し。……労働は有ゆる貨物の交換價值の眞尺度なり」と。(Wealth of Nations editd by Cannan, pp. 32, 33) 然れども労働量を測定することに當つては、實に労働時間のみならず、併せて労働の難易、工風を要することの多少等を參酌するの困難あるを以て、價值の測定は労働量に由らずして貨幣に由ることを常とす。然れども Smith を以て見れば、貨幣は他の貨物と同じく、其自體價值に變動あるを以て、價值測定の尺度たるに適せざるものなり。労働自體の價值を不變なりとなすの理由は Smith 之を一定量労働の労働者に感せしむる苦痛の常に同一なる一事に求めたり。曰く「労働の同一量は、有ゆる時及び處に於て、労働者に取りて同價值なりと言ふことを得べし。その健康、體力、及び元氣の普通状態に於てし、その熟練及び技巧の普通程度に於てすれば、彼れは常にその安易、その自由及びその幸福の同一部分を抛たざる可からず。」故に労働の報酬として受くる貨物の幾許なるを問はず、彼れが投せざる可からざる價格は、常に必ず同一なり。その購ひ得る貨物量

には増減あるべしと雖も、變動は貨物の價值にありて、之と交換せらるゝ労働の價值にあらず。労働のみ遂にそれ自體の價值に變動なきを以て、獨り有ゆる時、有ゆる處に於て一切貨物の價值を測定比較すべき終極眞實の尺度なり。故に労働は「その眞價格にして貨幣は單に其名義價格に過ぎず」(p. 35)「同一の眞價格は常に同價值なりと雖も、金銀價值變動の爲め、同一の名義價格は往々甚だ價值を異にする可あるなり」(pp. 35-6)。長年月を取りて見るに、同一稱呼の貨幣に含有せらるゝ金屬量の、時代に由りて同じからず、又金銀一定量の價值其者に變動ある爲め、一定額の貨幣が代表する價值は甚しく異なる事あり。長年月を取りて見れば、労働者の食物たる穀物の同一量は、金銀の同一量よりも同量の労働を買ひ得るに近きを以て、長年月間に於ける價值の尺度としては、穀物金銀に優れりと雖も、またその價值の年々の變動は金銀よりも甚し。獨り労働に依て吾人は之を諸貨物の眞價值を長年月並に年々最大の精確を以て測定することを得るなり。(pp. 38-9) 以上叙ぶるが如く價值の尺度は労働なりと謂へる Adam Smith の意は、「一物の交換價值は是に由て購買若しくは支配し得る労働量に依て測定せらる」と云ふにあ

り。然らば一物の交換價值、即ちその一定量の他物の幾許量と交換せらるゝかを決するものは何ぞ。これ上記第二の問題なり。一物の價值は、その支配し又は購買する労働量に由て測定せらるるを説くと相並んで同じ章中に、Smith は一物と他物との交換比率は、その生産に費やさるゝ労働量に由て左右せらるゝと云ふが如き口吻を漏せり。例へば貨物が交換せらるゝ場合、是等のものは労働の或一定量の價值を含み、吾人は之を其時に於て等しき労働量の價值を含めりと見做さるゝものと交換す(p. 33)と云へるは、同一量労働の費やされたる諸貨物は、相互に等價なりと謂へるものと解するを得べく、又新鑛發見の爲め、金銀價值の下落せることを言ふに方つて、是等金屬を鑛山より市場に搬出する爲め費やすところの労働減少するを以て(as it cost less labour)市場に搬出せられたる曉き、その購買又は支配する労働は減少す(p. 35)と云へるは、物の價值はその生産に要する労働量の増減に由て増減するの義と解することを得べし。然れども是等の言は恐らく Smith の不用意に出でたるものにして、彼れの意が費やされたる労働を以て、有ゆる場合に物の交換比率を左右する唯一の働因となすにあらざる事は、彼れが第六章の冒頭

先づ資本の蓄積並に土地の占有未だ行はれざる前と、その既に行はれたる後の社會を分ち、特に前者に於ては生産に要する労働が交換比率を決定する唯一の事情なることを明記せるに徴して疑なしと信す。即ち曰く、彼の資本の蓄積と土地の占有とに並びに先だつ初期野蠻の社會に於ては、諸物の獲得に必要な労働量の比例は、その相互交換の規則たるを得べき唯一の事情なるに似たり。例へば狩獵民族の間に於て一頭の家狸を殺す爲めには、一頭の鹿を殺す労働の二倍を要することを常とせば、海狸一頭は當然(naturally)鹿二頭と交換せらるべきもの、或は鹿二頭の價值あるべきものなり。通常二日又は二時間の労働の所産たるものは、通常一日又は一時間の労働の所産たるもの、二倍の價值あるべきを當然 *natural* とす。(此場合労働の難易、特殊の技術熟練を必要とするの程度の參酌せられざる可からざることは Smith 明に之を認む)。此状態の下に於ては、労働の全生産物は労働者に歸屬し、且つ貨物の獲得若しくは生産に通常投せらるゝ労働量は、その貨物が通常購買し、支配し、若しくは之と交換せらるべき労働量を左右し得る唯一の事情なりと(pp. 49, 50)。然るに資本の蓄積土地の占有行はれたる後に於ては、嘗に

生産物の價值の悉く労働者の手に歸屬せざるに至るのみならず、貨物の價值は復た獨り投せられたる労働者のみの決するところたらざるに至る。謂へらく、資本一度蓄積せられ、其所有者之を生産に投ずるときは、生産物の價格の一部は此企業家 (undertaker of the work) に對する利潤として與へられざる可からず。故に労働者が原料に附加せる價值は、此場合二個の部分に分たる。一は労働者の賃銀支配に充てられ、一は雇主が原料及び賃銀として前拂ひせる全資本に對する利潤となる。(p. 50) 即ち貨物の價格中に於て、…利潤は労働の賃銀と全然異なり、且全く別の原則に由りて支配せらるゝ構成部分をなすものなり。既に斯の如くなれば、労働の全生産物は必しも常に労働者に歸屬せず。労働者は多くの場合己れを雇備する資本の所有者と之を分たざるべからず。通常一貨物の獲得又は生産に投せらるゝ労働量も、亦その通常購買し、支配し、又は之と交換せらるべき労働量を左右し得る唯一の事情たらず。豫め賃銀を支拂ひ、彼の労働の原料を供給する資本の利潤に對して、更に追加量の與へらるゝものなかる可からずと (p. 51)。更に又土地が私有せらるゝや、労働者は土地使用の許可を得んが爲に、その労働が聚集又は生産せ

るものゝ一部を地主に投棄せざるべからず。此部分は、若しくは畢竟之と同一物なる此部分の價格は、地代となり、全貨物過半の價格中に於て第三の構成部分をなすものにして、進歩せる社會に於ては、大多數貨物の價格は多少の程度に於て賃銀 (或は謂ふ労働) 利潤地代の三者を以て構成せらる。而して個々貨物の價格が、結局賃銀利潤並に地代に分解せらるるとせば、是等貨物の全量を以て成る一國年生産の全量、若しくは其價格もまた賃銀利潤若しくは地代として國民の間に分配せらるべし。故に、賃銀利潤及び地代は、一切所得並に一切交換價值の源泉たりと (p. 54)。價格若しくは交換價值の構成要素を明にしたる後 Smith は貨物の自然價格がその市場價格を左右し、後者は結局後者に歸着せんとするものなることを説明す。一貨物の自然價格とは、價格の三構成要素が、各々その自然率に一致せる場合の價格を謂ふ。而して價格構成要素の自然率とは、その普通率又は平均率の義なり。曰く、各社會又は各地方 neighbourhood には、労働及び資本の各種用途に於ける賃銀並に利潤の普通率又は平均率あり。…同じく又各社會及び各地方に於ては、地代の普通率若しくは平均率あり。…是等の普通率又は平均率は、之をその通常行はる

、時及び處に於ける賃鐵利潤及び地代の自然率と稱するを得べし」(p. 57)。一貨物の價格が其を産出し準備し且つ市場へ搬出するに投せられたる土地の地代、労働の賃銀、及び資本の利潤をその自然率に應じて支拂ひて正に過不及なきときは、此貨物は此場合その自然價格と稱すべきものを以て賣却せられたるなり(p. 57)。之に反し市場に於て或貨物が現實に賣買せらるゝ價格を稱して市場價格と云ふ。市場價格は現に市場に販出せられたる貨物量と有効需要 *effective demand* との關係によりて決せらる。有効需要は絶對的需要にあらずして、敢て貨物の市場價格を支拂ふとを辭せざるもの、需要の義なり。貨物量有効需要を満たすに足らざるときは、その市場價格は、その不足の程度、需要者の資力及び奢侈、並に貨物の重要な程度に應じて自然價格以上に騰貴し、貨物量有効需要に超過するときは、その過剰の程度及び賣手に取り速かに過剰物を處分し了するの必要切なると否とに應じて、市場價格は自然價格以下に下降し、貨物量と有効需要と正に相等しきときは、市場價格と一致す。斯の如く一定の時を取て云へば、市場價格は自然價格の上下に逸脱するものなりと雖も、長きに亘りて見るときは、自由競争の妨げらるゝとなき限

り、貨物量は有効需要に適合し、從て市場價格は自然價格に一致せんとするの傾向を有す。蓋し一貨物の市場價格その自然價格の下に在る時は、價格構成要素はその自然率以下に下降せざるを得ず。從て労働資本又は土地は、その現用途より撤回せられて、貨物の供給を減少せしめ、反對に一貨物の市場價格自然價格以上に在るときは、その生産に参加せる労働資本及び土地の何れかは、必ずその自然率以上の報酬を受くるを以て、労働資本又は土地は、他より吸引せられ來りてその供給を増加せしめ、何れにしても結局貨物量として有効需要に一致せしめずんば已まざるを以てなり。故に曰く「自然價格は……謂はゞ絶えず一切貨物の價格を吸引せる中心價格なり」と (p. 60)。是れを Adam Smith の交換價值及び價格論の主要とす。

三

上記の如く予が見るところを以てすれば、Adam Smith は購買せられ若しくは支配せらるゝ労働量を以て、交換價值測定の尺度となし、貨物と貨物との交換比率に至つては、原始野蠻の社會に限りて、貨物の生産又は獲得に費やさるゝ労働量之を決するも、資本既に蓄積せられ、土地既に占有せられたる曉に於ては、之を決定する

ものは生産に参加せる労働資本及び土地に對する賃銀利潤並に地代の多少なりとなすものなりと雖、此解釋に對しては疑を介むの餘地全くなきにあらず。疑問は資本の蓄積及び土地の私有既に行はれたる曉、貨物の價值又は價格は、果して賃銀利潤及び地代の三構成要素に由りて左右せらるゝものなるか、或は價值又は價格は依然として生産上に費やされたる労働量のみ決定するところにして、たゞその收得が、右の三要素に分配せらるゝに止まるかの點に懸る。予の解するところを以てすれば、Smith は資本の蓄積及び土地の私有未だ行はれざる前と、その既に行はれたる後とに由りて、貨物間交換比率を左右する原因の同一ならざる事を認めたること上述の如しと雖、彼れは又之と相容れざる物の交換價值は投下労働量のみ由て決定せらるゝも、資本の蓄積土地の占有行はれたる曉に於ては、生産せられたる價值全額は労働者の手中に歸入せずして、彼は之を地主資本家と分つものなりとの思想をも表白せること一再に止まらざるなり。例へば既記の如く、資本家が生産に参加せる曉に於ては、労働者が原料に附加せる價值は、此場合二個の部分に分たる。一は労働者賃銀支拂の用に充てられ、一は雇主が原料及び賃銀

として前拂ひせる全資本に對する利潤となる」と云へるが如き、一旦土地が悉く私有財産となるや、地主も亦凡ての他の者と同じく蒔かざるところに刈らんと欲し、その自然的生産物に對しても猶且地代を要求すと(原註)云ふが如き、或は土地が私有財産となるや、地主は労働者が土地より或は産出し或は蒐集し得る殆ど一切生産物の配當を要求す。地主の地代は、土地の上に投せられたる労働の生産物に對する第一の控除たり。「……利潤は土地に投せられたる労働の生産物よりの第二の控除たり。他の殆ど凡ての労働の生産物も亦同様の利潤控除を免れず。一切の手工業及び製造業に於て、労働者の大部分は豫めその製作の原料と、製作の完成するに至る迄の賃銀と生活資料とを供給する雇主あるとを要す。雇主は労働者の労働生産物、又は労働がその加へられたる原料に附加する價值の分配の與かる。彼れの利潤は此配當分を以て成る。」(p. 67)と云へるが如きは是なり。故に例へば Zuckerkandi は、Smith の眞意は交換價值が常に労働のみに由て造られ、利潤及び地代はその造られたる價值の控除に由て發生するものにして、之が爲めに物の價值價格は變動を閱することなしと謂ふにあることを認めんとするものなりと雖

も (a. a. O. S. 247—252) 既に Adam Smith が特に資本の蓄積土地の占有未だ行はれざる場合を限りて、貨物交換比率の、費やされたる労働のみに由て決せらるゝ事を言ひ (pp. 49, 66) 價値の尺度は一貨物の購買支配する労働量なる事を明にしたる後、文明社會に於ては貨物の獲得生産に費さるゝ労働は、その購買支配すべき労働量を左右せざることを明記し (p. 51) 「賃銀利潤の高低は價格高低の原因なる事を認むる (p. 147) に徴して、予は Zuckerkandi 等の解釋を容るゝこと能はず。又物の價値は常にその投下労働量に由て決せらるゝものにして、賃銀利潤及び地代は既有的の價値を分取するに過ぎずとせば、Smith は是等價格構成部分の増減が、決して價格の高低を來す能はざる事、並に構成要素の何れかの増加は、必ず残る要素の減少を來すべきの理を明にせざるべからず。今地代は姑らく措き、賃銀と利潤とに就て云へば、彼れは右記の如く此の二者の騰落が價格騰落の原因たることを認め、労働賃銀の増加は價格中賃銀に歸約せらるゝ部分を増加せしめ、以て必然多くの貨物の價格を騰貴せしむ。」 (p. 88) と謂ひ、利潤に就ては「事實上高利潤は高賃銀よりも遙かに多く製作物の價格を騰貴せしむるの傾あり」と謂へり。蓋し、高率の賃銀は

貨物價格の構成分子中賃銀より成る部分を増大せしむることに依りて、それ丈が價格を騰貴せしむるに止まれども、利潤率の騰貴は累積的に作用して物價を騰貴せしむ。即ち利潤率の騰貴は先づそれ丈が價格をして高からしむれども、斯く高價となれる貨物をば、原料として購入すべき位置にある資本家の投資はそれ丈が膨脹し、而して膨脹せる投資額に對して更に騰貴せる高率の利潤要求せらるゝものとすれば、その物價に及ぼす影響は累積的ならざるを得ずと謂ふにあり。 (p. 99, 100)

又 Smith に從へば賃銀騰貴の原因たる國富の増進はまた利潤率減少の原因たるを以て、賃銀の騰貴と利潤の減少とは常に相伴ふと謂へり。然れどもこは同一の原因が賃銀を騰貴せしめ、且つ、利潤を減少せしむと云ふに止まり、Ricardo に於けるが如く、一定量額中賃銀の收得すべき部分増大したる爲め、利潤に歸すべき殘額減少し、或は利潤に歸すべき部分増大したる爲め、賃銀となるべき殘額減少すと謂ふにはあらず。こは右述の如く Smith が利潤の騰貴が、賃銀の下落の之を償ふ以上、價格を騰貴せしむる事、或は賃銀利潤の並に騰貴することあり得べきを認め

たる事(p. 94)に依て明かなりと信ず。既に賃銀利潤の高低は價格高低の原因なる事を認むる以上土地資本の私有蓄積行はれたる曉に於て、費やされたる労働量は決して貨物交換比率を左右する唯一の事情にあらざること認めざるべからず。而して後に記すが如くRicardo, Mc Culloch, Torrens等がSmithを解するところも亦斯の如し(Adam Smithの價值論に就て本誌に掲載せられたる論稿甚だ多し。第五卷第三號(氣賀勘重)第七卷第一號(河上肇)第十三卷第六、七、八、九號(加田哲二)第十五卷第二號(三邊金藏)参照。本文中述ぶるところは三邊教授の説に同應するところ多くして、加田教授の説と相容れざるところあるに似たり。然れども「經濟價值論」中の一節(一〇六頁)口吻に由て察すれば教授は必しもその舊説を固執せざるもの乎

四

Adam Smithの學說中眞意を捕捉するに困しむは、その地代と價格との關係の説明是なり。既記の如く、彼れは賃銀利潤及び地代を以て價格の構成要素、或は「交換價值の三源泉」となし、是等三要素の自然率は、生産物の自然價格を決定し、貨物の市場價格は究竟その自然價格に歸着せんとするものなることを説けり。果して然

らば、賃銀利潤及び地代は別の原因に由り價格に先だちて決定せらるゝものならざるべからず。賃銀及び利潤に就てSmithが説くところは、大體に於て人をして理解に苦しましむるところなし。獨り地代に就ては、彼れの所説はその價格論と相容れ難き觀あるなり。Smith謂へらく、「土地の使用代價として考へられたる地代は、當然借地人が土地の實狀に於て納付し得る最高の價格なり」と。その意は土地の生産收益より資本の維持費、並に其地方に於ける普通利潤を控除せる餘剰を指すに外ならず。蓋し借地人若し餘剰の全額を地代として納付せず、その一部を己れが手中に保留するときは、猶ほ餘力を有するものなるを以て、之を最高の價格と云ふ可からず、又地代この餘剰額を超過するときは、借地人は損失を忍びて之を納付するものなるを以て之を支拂ひ得る價格と謂ふ可からざるを以てなり。元來土地生産物は、其普通價格が投下せられたる資本を回收し併せて普通利潤を擧げ得る部分に限りて市場に搬出せられ、而してその價格若し是を行ひて餘あるときは、その餘剰部分は當然地代となり、餘剰なきときは地代は生ぜず。而して土地生産物の價格は需要之を決定すと。果して然らば地代は賃銀利潤と其生産物價格に

對する關係を異にするものと謂はざるべからず。地代も賃銀利潤と共に同じく價格構成部分の一たりと雖も、その趣は同じからず。故に曰く「賃銀及び利潤の高低は價格高低の原因にして、地代の高低はその結果なり。特定貨物の價格の或は高く或は低きは、これを市場に搬出する爲め支拂ふことを要する賃銀及び利潤の或は高く或は低きが爲めなれども、地代の高く低く或は悉無なるは、貨物の價格の或は高く或は低き爲め、彼の賃銀と利潤とを支拂ふに足る以上大に餘剩あるか、少しく餘剩あるか或は全く餘剩なきかに由るものなり」(pp. 145, 146, 147)。然れども茲に至つて Smith は循環論に陥れりとの譏を免るべからず。奈何となればその説くところは、地代の有無多少は生産物價格に由て決せられ、生産物の時々市場價格は究竟その自然價格の支配するところとなり、一物の自然價格はその構成要素即ちその生産に参加せる勞働資本及び土地に對する賃銀利潤及び地代の自然率に由て定まり、而して價格構成要素の一たる地代は生産物價格の決定を俟つて始めて決せらるると謂ふに歸するを以てなり。地代にして果して價格を俟つて始めて決定せらるゝものならば、市場價格と自然價格とに關する其説は之を放棄

せざるべからず。自然價格は市場價格以外に獨立して成立すること能はざるの理なるを以てなり。

Ricardo は價值を論ずるに當りて、貨物交換比率の決定は、土地資本の私有蓄積の前と後とに由りて果して其法則を異にするものなりや否や、及び地代と生産物の價格とは何れが先づ存して他を決定するかを明にせんことに頗る力を用ゐたり。

五

Ricardo の Principles 第一版(一八一七年)を取りて見るに、彼も亦市場に於ける時々偶發的原因に由りて定まる貨物の現實價格又は市場價格 actual or market price の外に究竟之を支配する本來の自然價格(primary and natural price)なるものを求め、市場價格は時々需要供給に由りて變動を免れずと雖、自由競争の行はるゝ限り、久しきに亘りて二者に相離るゝこと能はずして、市場價格は結局自然價格に一致すべき約束あるものと認めたり(Principles, 1817, chs IV, XXVIII)。而して Smith にありては、その謂ふところの自然價格は即ち貨物の交換價值に外ならざるものならんと推測

せらるゝに止まれども、Ricardoはその然る事を明記して、貨物の交換價值又は一貨物が有する購買力と云ふに當りては、予は常に貨物が何等一時偶然の原因に妨げられざる場合に有すべき購買力を意味す。是れ即ちその自然價格なり。」と謂へり。(ibid. p. 8) 故に彼れの交換價值論は、貨物と貨物との市場に於ける現實の交換比率は究竟何に由て支配せらるゝかの法則を立てんとするに外ならざるものなり。

交換價值の法則を立つるに先だち、RicardoはSmithと共に使用上の價值と交換上の價值とを區別す。Ricardoにありても、使用價值は特定物の利用、交換上の價值は其物の所有に由て賦與せらるゝ、他物購買力の義なり。而して謂へらく、如何なる方法に於ても人の満足に寄與するところなきものに交換價值あるべきの理なきを以て、交換價值は使用價值あることを不可缺前提とすと雖も、利用大にして價值僅少又は皆無なるものあり、又利用小にして價值大なるものあることは人の日常目撃するところなるを以て、利用は交換價值に絶對的に缺く可からずと雖も、その尺度にはあらず。」既に利用あるものとせば、貨物の交換價值は二個の源泉より生ず。その稀少性と之を取得するに要する勞働量と是なり。人爲を以て其存在

量を増減すること能はざる貨物の價值は、當初之を造るが爲めに要したる勞働量と何等相係はるところなく、一にその稀少性に由てのみ決せられ、之を獲んと欲するものゝ富裕並に嗜好の度に應じて變動す。珍奇なる繪畫彫刻、稀觀書、古泉、一定の土地を限りて栽培せらるゝ葡萄にて醸せる特殊の酒の價值の如きは即ち是なり。然れどもRicardoに従へば、此種貨物は日常賣買せらるゝ貨物中の極めて小なる一部分をなすに過ぎず、大部分の貨物はその獲得に必要な勞働の投下に由て、際限なく之を増加せしむる事を得るものにして、彼れが交換價值を論ずるに方りてその念頭に置くところも、常に人間の努力に依てその數量の増加し得べく、而してその生産上に無制限なる競争の作用あるものゝみなりとす。(ibid. p. 1-3)

此種の貨物の價值は、その生産に費やされたる勞働量の決するところたり。乃ち曰く、社會の早期諸段階に於ては、是等貨物の交換價值、或はその一方の貨物の幾許が他の貨物と交換せらるべきやの規則は一に (solely) その各自に費やされたる勞働量に由りて定まるものなり (ibid. p. 3-4) 而して、若し諸貨物に體現せられたる勞働量にして、その交換價值を左右せば、勞働の増加毎に、その加へられたる貨物の價

値は必ず之を騰貴せしめ、その減少は必ず之を下降せしめざること能はず」と(р. 5)。既に交換價值を左右するものは貨物の生産に費やされたる労働量なりとせば、費やされたる労働量はまた價值の變動を測定せる尺度たることを得べし。故に曰く「若し世に一貨物の如何なる時に於ても之を生産する爲め正に同一量の労働を要するものありとせば、その價值は不變なるべく、依て以て他物の價值の變動を測定すべき絶好の尺度たるべし」と。是に由て觀ればRicardoは費やされたる労働に貨物交換決定の原因を求むると共に、既有的の價值の測定尺度をも併せて此に求むるものなり。

此に於て彼れはその經濟學的思索の基礎となれるAdam Smithと所見を殊にす。彼れは、凡そ一物の眞價格、即ち之を獲得せんと欲する人が、眞に爲めに費やすところのものは、之を獲得する努力煩勞なり。凡そ一物の之を獲得し、而して之を或る他の物と換えんと欲するものに取りての眞價值は、彼れが自ら免れて他人に課することを得る努力煩勞なり。「労働は一切物に對して支拂はれたる最始の價格、本來の購買貨幣なりき。」資本の蓄積土地の私有未だ起らざる原始社會に於ては、貨

物獲得に要する労働量間の比例はその相互の交換の規則たるべき「唯一の事情」たるが如しと云ひて、交換價值の眞源泉を定義すること爾かく正確なりしAdam Smithが自ら別の價值の標準尺度を立て、一貨物と交換せらるゝ労働量又は穀物量を以て之に充てんとしたることを以て一貫を欠ぐの嫌あるものとなすなり(p. 50)。Ricardoを以て觀るに、労働の生産物が悉く報酬として労働者の手に收得せらるゝものとせば、價值を測るに費やされたる労働(labour expended on, realized in, exercised on, bestowed on, necessary or required for the production of commodities)を以てするも、支配せらるゝ労働(labour purchased or commanded)を以てするも擇ぶところなし。蓋し或貨物が一定量の労働量を支配すとは、反面より之を觀れば労働一定量に對して報酬として一定量貨物の與へらるること外ならざるを以て、例へば労働生産力倍加するときは、その報酬たる貨物量も亦同じく倍加すとせば、該貨物の價值は之を生産する爲め費やされたる労働量を以て測るも、之に對する報酬貨物量に由て之を測るも結果に於て異なるとなきを以てなり。然れども實際に於て労働者は労働生産物を悉く收得せざるを以て、取るところの尺度の何れなるかに由りて其結果同じか

らず。Adam Smithは詢によく金銀の、其自體の價值動搖を免れざるを以て、之を價值計測の尺度となすべからざるの理を説明したりと雖も、彼れが尺度たるに適するものと認めたる勞働又は穀物の交換價值と雖も決して此理の外に立つものにあらず。即ち穀物の價值は供給増加の難易、需要の増減、新地域の開發、輸入の有無等に由て高低し、勞働の價值なる賃銀も亦當に需要供給の關係の爲めのみならず、勞働者生活必需品の價格と共に變動す。Adam Smithが勞働の購買し得る貨物の量には増減あるべきも、變動せるは貨物の價值にして之を購ふ勞働の價值にあらず。『勞働のみ遂に其自體の價值に變動なきを以て、獨り有ゆる時、有ゆる處に於て一切貨物の價值を測定比較すべき終極眞實の尺度なり』と謂へるは當らず。『貨物の現在又は過去の相對價值を決するものは、勞働が生産すべき貨物の比較量にして、勞働者がその勞働と交換して受くる貨物の比較量にてはあらざるなり』と謂ふ。(ibid. pp. 6-11)

Ricardoは先づ此點に於てSmithの價值論より離れたり。(未完)

近世資本主義起源考 (二)

阿部 秀助

三

資本主義の概念を肯定せんとするものには物的方面よりするものと精神的又は人格的方面よりするものがある。而して前者の内容が後者よりも複雑であることは主として之れが根本的基礎である資本其者の概念がフオン・ツキザーが云つた如く何等統一的でなく頗る多種多様に存する點である(一)。今、試みに其主なるものを擧ぐれば次の如くである。

一、資本其者を以て我邦の現時に於ける民法が規定するが如く「元本」即ち利子を齎らす資本(Capitalis Pars debiti)の意義に解するものである。斯くの如きは各國の法律上に於ける條文に於て多く見る處で、勿論、之れが内容中には株券、其他、有限責任會社の持分等をも包有するのである。